

---

# 牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編集

南瓜姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編集

### 【Nコード】

N5124N

### 【作者名】

南瓜姫

### 【あらすじ】

牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編小説を載せています。思いつくまま、キャラ同士の恋愛を描きます。

## discovery

アタシ、毎日退屈していたの。だってカスタネット大陸って何にもないんですもの。そりゃあ、ミオリさん 鑑定士の未亡人の元で彫金や石の鑑定の修行をすることは楽しいわよ。でも、何かが足りなかったのよ。でもある日、石の鑑定に訪れたアカリを見たとき、ビビビッて来ちゃったの！ 原石を見つけたのよ。

アカリは顔や身体を泥だらけにして石の鑑定にやって来た。あいにくミオリさんが墓地に出かけていて留守だった。

「悪いけど、鑑定士が出かけてるの。またにしてちょうだい」

アタシは指先にマニキュアを塗りながら、ふとアカリを見上げたの。吸い込まれそうなきれいな瞳だったわ。目は切れ長で鼻は大きくらず小さからず。きゅつと結んだ口元に意志の強さを感じたわね。芋かと思っただけど、よく見るとパーツは整っている。

「あなた、何？ その格好。ダサいわね」

そう声をかけると、アカリは頭をかいて恥ずかしそうだった。何をしたいかわからないらしい。んもうつ！ まどろっこしいわね。アタシ、思わず約束しちゃったわよ。明日の三時に仕立屋へいらっしやいて。

\*

翌日、約束の時間より早く仕立屋に着いたアタシは、主のセラフ

さんと話したの。「今日はどうしたんだい？」って聞くから事情を話したわよ。そうしたらセラフさんったらアカリの事を話し始めたわけ。一人でこの大陸に来て、牧場を経営しているって。町の人たちとも友好的にやっっているらしいわ。

そこへドアを開けてアカリがやって来た。

「こんにちは」

「いらっしやい、ジュリがお待ちかねよ」

ん、もうっ！ セラフさんたら余計なことを言うんだから。

アカリはシャワーを浴びてきたようで、今日は泥だらけじゃなかった。肌は白くてきめが細かい。セラフさんの孫のコトミも色白だけど、それに匹敵するわね。

「じゃあ、早速見立ててあげる」

アタシはセラフさんに断わって、見繕っておいた服をかわるがわるアカリの身体に当てた。うん、この子はブルー系が似合うわね。

「アカリ、あなた、おニューの服を着ていく場所の予定はあるの？」

すると、アカリは頭をかきながら、海祭りだといった。町長の息子のギルに誘われているらしい。海祭りって事は、夜の花火大会にも出かけるのよね。

アタシはアカリに似合う目の覚めるようなブルーのサンドレスに、カラフルなビーズをあしらったビーチサンダル、つば広の白い帽子をセットした。

\*

花火大会はコトミと行ったわ。あの子、珍しく誘ってきたのよ。アカリの様子を見てやろうと思っていたから、ちょうど良かったわね。二人で浜辺を歩いていると、前方にアカリとギルが見えたの。

アカリは、アタシがコーディネートした格好だったわ。うん、さすがアタシね。すぐボーイッシュな彼女に似合っていたわ。ギルだってまんざらでもない様子で、鼻の下を伸ばしているし。

でも、なんか面白くなかった。なぜだかわからないけど、イライラするのよ。

すると、アタシたちに気付いたアカリが会釈したわ。隣のコトミが丁寧にお辞儀していた。でも、アタシ面白くなかったから無視したの。そうしたら、アカリ、哀しそうな顔をしたわ。そのとき胸がキュンって締め付けられた。

\*

翌日、アカリが顔を泥だらけにしてやってきたわ。今日はミオリさんがいたから、アタシの出番はなくて、店の隅のソファに座って宝石を磨いていた。

鑑定を終わらせたミオリさんがアタシの前に来たの。墓地に行ってくるから留守番をお願いねって。もちろん、アタシは了解したわ。ミオリさん、帽子をかぶって店を出て行った。

「はあ」

思わずため息をついちゃった。

「どうかした？」

ええっ！？ アカリ、まだ居たの？ アカリがアタシの顔を覗き込んでいるのよ。

「あ、あんたこそどうしたのよ」

そう言うつと、アカリはリュックからタッパを取り出した。この間のお礼にと手渡される。タッパの蓋を開けると中に入っていたのはコロツケだった。ちょうど小腹の減っていたアタシは「ありがとう」と断わって、コロツケを一つつまみ口に入れた。ん、カボチャのコロツケね。すると、アカリは「カボチャのコロツケってジュリさんが好きなんですよね」と言った。まあ、アタシの好みをリサーチしてくれたの！？ 「じゃあ」と言っつて、アカリは帰ろうとした。アタシは思わず引き止めた。

「ねえ、お茶飲んでいかない？ アタシ一人じゃ留守番退屈なのよ」

そう誘つと、ヒカリは肩をすくめながらも、ええと答えた。さあ、ギルから彼女を奪うわよ。だって、アタシ、アカリに惚れちゃったんだもの。

**d i s c o v e r y (後書き)**

ジュリ×アカリのお話です。

はっばうさい!?

ここはタムタムの森の最奥の沼地に建つ一軒の家である。外見はおどろおどろしい家だが、そこにはとてもキュートな魔女さまが住んでいた。そして、僕　タケルは魔女さまに会いに来ていた。魔女さまに命じられ、僕は火鍋をかき回している。魔女さまはソファに座り、手の指にマニキュアを塗りながらつぶやいた。

「イチゴのアイスが食べたいわ」  
「作ってきますよ」

僕は急いで家に帰り、イチゴのアイスを作って、今魔女さまの家の前にいる。喜んでくれるかな、イチゴのアイスって結構自信があるんだ。

「魔女さま、入ります!」

「どうぞー」とあの可愛らしい声が聞こえてくる。僕はいそいそと中に入り、魔女さまにイチゴのアイスを差し出した。

「あら、いらないわ」  
「え?」

「今はカボチャのパイって気分なの。悪いわね」  
「ははは、そうですか……冷凍庫に入れておきますから後で食べてくださいね」

また始まったよ、魔女さまの気まぐれ。でも、僕は彼女にメロメロなんだ。どうしても、好きって言わせたいんだ。

「じゃあ、パイを作ってきますね」

少々脱力した僕は帰ろうとした。すると魔女さまに呼び止められた。

「待つて、もういいわ」

「え？」

「タケルが女の子ゼーんぶに優しいのは知ってるんだから」

「そんなことないです」

「はっぽうさいってやつでしょ？ アタシは騙されないんだから！」

そう言つと、魔女さまは背を向けてうつむいた。

「見たのよ、昨日ハモニカタウンで、あんたが酒場で女の子に抱きついているところ」

タベ、僕は酔っ払ったシーラにからまれたことを思い出した。

「その女ったら巨乳で、あんた鼻の下を伸ばしていたじゃない。あ、アタシだって胸は大きいんだから。あんな小娘に負けるわけないじゃない……」

あれは、シーラが抱きついてきたのだ。鼻の下が伸びていたのは否定しないが。支離滅裂なことを口走っている魔女さまの声がだんだん震える。ひよっとしてやきもちを妬いてくれるのだろうか？

「魔女さま」

「な、何よ」

「はっぽうさいじゃなくて八方美人でしょ？」

「そ、そうとも言っわね」

「僕は魔女さま一筋だっ てわかりませんか？」

魔女さまの顔がみるみる赤くなる。僕の言っ た事を理解してくれ  
たみたいだ。

「もう、やだ！ 何よ、責任取りなさいよ」

「どう取っ たらいいんです？」

魔女さまは上目遣いでじっ と僕を見つめた。

「アタシのものになりなさい！」

「それっ て、僕のものにもなるっ て意味ですよね？」

そう確認すると、魔女さまは顔が青くなっ たり赤くなっ たり、ま  
るで信号のようだ。僕は魔女さまの肩に手を置いた。目を見開いた  
魔女さまをじっ と見つめる。潤んだ瞳の中に自分が映っ た。そっ と  
唇を押し当てる。魔女さまは、さらに大きく眼を見開いていたが、  
だんだんまぶたを下ろしていった。そっ と離すと、魔女さまはぼっ  
っ としていたが、また目を見開いて僕をにらみつけた。

「な、何するのよー！」

「あれ？ 経験豊富な魔女さまだからキスもなれているかと思っ た  
のに」

そっ 意地悪を言っ と、魔女さまは目に涙をいっ ぱいためていた。

「い、いくら長く生きているからっ て、初めてなんだから仕方ない  
でしょー！」

ああ、僕の好きな魔女さまはこんなに可愛い。いつも僕を奴隷み

たいに扱っけれど、中味はピュアな女性だったんだ。魔女さまの反応に気を良くした僕は、魔女さまの背中に手を回し、耳元でささやいた。

「これから僕の家で夕食を食べませんか？」

「い、行つてあげてもいいけど」

素直じゃない魔女さまに止めを刺す。

「夕食の後、ゆっくり話をしましょうね。今夜は帰しませんよ」

魔女さまは目を見開いて僕を見ていたが、にやつと笑みを浮かべた。

「いいわよ。ずっとぎゅっとしててね」

顔が爆発しそうだった。魔女さまを赤くしようと思ったのに、かえって僕がやられてしまった。

はっぽんちいー!? (後書き)

## 無償の愛

今にも枯れそうな巨木の下で、女神さまは両手を胸の前で組み、祈っていた。その姿は教会のステンドグラスに描かれていたものと同じだった。地まで届く長い瑠璃色の髪が彼女を包み込んでいる。

「女神さま、救世主を連れてきたの！」

そう叫ぶフィンの言葉に女神さまは祈るのをやめた。そして僕を見て微笑んだ。

「お名前は？」

「タケルです」

「何も知らないあなたを巻き込むことになって申し訳なく思います。しかし、あなたの力が必要なのです」

「僕でよければお力になります」

「ありがとうございます」

そう答えると、女神さまはふらついた。僕は慌てて女神さまに駆け寄り身体を支えた。女神さまは力なく微笑む。長いまつ毛、海のような深い青い瞳。一瞬で心を奪われた。

\*

それから、フィンと共に五つの鐘を探す毎日に明け暮れた。その傍ら、女神さまの様子を毎日欠かさず見に行く。とても心配なのだ。自分の身体を省みず、島の平和だけを願っている。そして、僕を気にかけてくれる。「無理をしてはいけませんよ」と。そんな献身的な女神さまをいつしか愛するようになった。しかし、自分はただの

人間、女神さまとつりあうはずもない。

「このごろ、タケルがここへ来てくれると、とても心がうきたつのが感じますわ」

ある日、女神さまが頬を薔薇色に染めて、僕に告げた。僕はその言葉に有頂天になる。

「女神さま、少し散歩をしませんか？」

女神さまは少し迷っていたが、散歩しても良いといってくれた。神殿跡を二人で歩きながら、僕はたずねた。

「女神さまは独身なのですか？」

「独身、ですか？ そうですわ。私は女神ですもの、全ての人に愛を注がなければなりません」

女神さまはそう答えた後、僕をじつと見た。そして泉に視線を落とす。

「でも、最近一人の人に心を奪われるのです。いけませんわね、女神なのに」

「誰なんでしょう、その幸せな奴って」

僕がそう質問を投げかけると、女神さまは困った表情をした。

「私は自分が幸せになるようなことは出来ません。皆の幸せを祈ることが勤めなのです」

両手を胸の前で組み、祈るように答える女神さまに、僕の胸は悲

鳴を上げる。女神さまにこの想いを打ち明けることは、女神さまを苦しめることになるのだろうか。

「でも、女神さま自身が幸せでなければ、人間の幸せを祈れないのではありませんか？」

僕の言葉に女神さまは目を見開いた。

「タケルの幸せは？」

「僕は……」

答えられなかった。僕らの間に沈黙が流れる。すると、女神さまが口を開いた。

「タケルには幸せになってもらいのです。どうしたらよいのでしょうか？」

僕は女神さまの言葉に決心をした。今、この想いを告げなければならぬと思った。

「僕の幸せは……あなたと共に生きることです。叶いませんか？」  
「タケル」

女神さまは手を胸の前で組んだまま涙を流した。僕はそつと女神さまの背中に手を回す。

「いつもあなたを想っていました。でも、あなたと他の方との幸せを祈らなくてはいけないと思っておりました。日増しにあなたへの想いが募り、女神であることを呪う夜もありました」

「僕もです。あなたは全ての人のものだから」

女神さまは首を横に振る。

「いいえ、私の幸せはあなたを愛することです。でも、あなたも私を愛していてくれたのかと思うと」

女神さまはそれ以上言葉に出来ないようだった。

「ずっと待たせてしまいかもしれませんが、鐘を全て鳴らしたら僕と結婚して下さいね」

女神さまは僕を見つめて、ただうなずいてくれる。僕は女神さまの髪をそつとすくった。そしてその瑠璃色のつややかな髪にそつと口づけを落とした。

## ナイチンゲール

僕は例のごとく畑で倒れてクリニックへ運び込まれた。今は、ベツドの上でおとなしく横になっている。

「タケルさん、また無理をしましたね」

「すみません」

僕の額のタオルを取り替えながら、アニスは小言を漏らした。タオルは僕の熱で温かくなっている。アニスの手が僕の額に触れた。ひんやりとして気持ちいい。

「少しは熱が下がったようですわ」

「じゃあ、帰ってもいいかな？」

アニスはその切れ長の涼しい目で僕を睨みつけた。

「いいえ。まだだめだと先生がおっしゃっていました」

ああ、そんな目で見ないで欲しい。

「あ、でも動物たちが……」

「リーナさんが後はやってくれるそうです」

取り付くしまもない。僕だって好きでぶっ倒れているんじゃない。早く、牧場を大きくしたい。アニスに似合う一人前の男になりたいんだ。

アニスはいつも僕を子ども扱いする。そりゃあ、大人なウォン先生と比べたら子供っぽいかもしれない。アニスは僕よりたった二歳

年上なだけだ。でも、仲の良いアカリに相談したら、「男は幼いから、三つ上くらいが精神的に同じなのよ」と宣告された。そうなる、アニスから見たら僕は五つも下くらいに見えているって事なのだろうか。それを考えると落ち込むが、アニスに対する僕の気持ちは変わらない。

そんなことを考えていると、ボソリと呟きが聞こえた。

「タケルさんが元気でいてくれないと、何も手につかなくなってしまいますの。無理はなさらないで下さいね」

ハッと我に返り、アニスを見る。アニスは頬を赤くして微笑んでいた。

「それってどういう意味？」

「な、何でもありません」

アニスはそう答えると、洗面器を持って病室を出て行った。

入れ替わりにウォン先生が入ってきた。ベッドの横の椅子に座りカルテを見る。そして僕を一瞥すると、眼鏡をくいと上げた。

「無理はしないように忠告したはずですが」

「すみません」

「アニスを心配させないで下さい」

「どういう意味ですか？」

僕が詰問すると、ウォン先生は眉間にしわを寄せた。

「そのままの意味ですよ。彼女は君を弟のように思っている。君が

倒れてここへ運ばれてくると、それは心配するのです」

ウォン先生は面白くなさそうに見えた。僕だって面白くない。第三者、それもライバルだと思っているウォン先生から最も聞きたくない言葉を聞いたのだから。

「そうですね。もっとしっかりしてアニスに頼ってもらえるようにしないと」

僕の言葉にウォン先生はカルテに書き込む手を止めた。

「それは宣戦布告と受け取っていいのかね？」

「ええ。先生のも宣戦布告だったのでしょうか？」

ウォン先生は苦笑いを浮かべる。一触即発の雰囲気だ。そこへ洗面器を持ったアニスが入ってきた。

「あら、先生。診察は終わりましたか？」

「ええ、タケル君は回復したようです。もう帰ってもらいましょう」

アニスは洗面器をテーブルに置くと、嬉しそうに微笑んだ。

「まあ、良かったですわ。じゃあ、途中まで一緒にしましょうか？」

すると、ウォン先生が咳払いをした。

「アニス、薬の調合を頼みたいので残ってもらえますか」

「あ、はい」

くそ、職権乱用じゃないか。僕はむっとした。

アニスは僕を見て申し訳なさそうに微笑んだ。

「ごめんなさい。クスリを持って帰りに寄りますから、おとなしく寝ていてくださいね」

「はい」

ウォン先生の誇らしげな顔を見ると腹が立つ。僕は起き上がり、布団をたたんでベッドを整えると、頭を下げて病室を出た。

牧場への帰り道、砂浜に立ち寄った。辺りは夕焼けで橙色に染められている。太陽は今にも地平線に飲み込まれそうだ。

「ばっかやろうー！」

海に向かって叫んだ。いくらどうあがいたって、大人なウォン先生に勝てるわけではない。こうやってむきになればなるほど、余計子供だって露呈する。

「あーあ、どうすればいいんだよ」

髪をくしゃくしゃとかきむしり、砂浜にしゃがみこんだ。

どれくらい経ったか、海岸は薄暗闇に包まれている。身体はすっかり冷えてしまった。

「寒くなってきた、もう帰ろう」

そう思って立ち上がり、お尻についた砂をパツパと払う。すると、後方から砂を踏みしめる音がした。ゆっくり振り返ると、それはアニスだった。

「アニス」

「タケルさん、家で寝てなさいって言ったでしょう!」

「ご、ごめん」

僕が叱られた子供のようにうつむいていると、背中がふんわりと温かくなる。アニスが自分のショールを僕にかけてくれたのだ。そして僕をじっと見つめてささやいた。

「ほんとにしょうの無い人。あまり心配させないで下さい」

アニスは僕に背を向けて歩き出した。

「あ、あの」

声をかけると、アニスは振り向いた。その顔は笑ってはいない。神妙だった。

「私、ウォン先生にプロポーズされました。どうしたらいいですか？」

「どうしたらって」

僕の頭の中が真っ白になる。アニスがウォン先生のものになる。もう僕の手の届かない人になってしまう。

僕はハッと我に帰り、アニスの手をつかんだ。

「断わってください」

「どうしてですか？」

「あなたが好きだから。まだ大人らしくないけど、きっとあなたに見合う男になるから」

「やっと言って下さいましたね」

アニスはそう答えると、僕の胸に飛び込んできた。僕は何がなんだかわからずに、腕の中のアニスを見た。アニスは僕を見上げて頬を赤く染めている。

「私もあなたが好きです」

「ほんとに？」

「最初は弟みたいに思っていました。でも、とても頼りがいがある人だと」

僕が、頼りがいがある？ 嘘みたいだった。子供っぽい僕を、アニスが頼もしいと思ってくれたなんて。

「……じゃあ、プロポーズは断わってくださいね」

「もうお断りしてますわ」

「え？」

アニスはいたずらっ子のように僕を見た。

「だってタケルさんったら何も言ってくれないんですもの」

僕は全身の力が抜けそうだった。ああ、こうしてアニスの手のひらの上で踊らされるのだろうか。

## 大人の時間

僕はカバル草原の片隅で、大の字になって寝転がっていた。青い空を眺めていると、とても爽やかな風が頬を撫でる。はるか向こうには、大風車が風を受けてゆっくりと回っていた。

「カルバンさん、こんなところでお昼寝ですか？」

目の前に顔をのぞかせたのは、この島の牧場主のヒカリである。人懐っこい笑みを浮かべて僕を見つめている。僕より随分と若いのに、独りで牧場を経営している女の子だ。

「ああ。ヒカリも一緒にどうだい？」

ヒカリは口元に手を当てて、ふふっと笑った。

「遠慮しておきます。おつかいの途中なんです」  
「そうか、残念だな」

ヒカリは一礼すると、タムタムの森へ駆けていった。僕は取り残されてぼうつとしてしまう。あの可愛い牧場主を何とか振り向かせようと頑張っているのだが、いつものらりくらりとかわされている気がする。でも、彼女の態度からすると、きっと僕に気があるに違いない。僕は狙った獲物は逃がさない性質である。逃げられれば逃げられるほど追いかけたくなるのだ。

ある日、ヒカリが宿屋の僕の部屋を訪ねてきた。

「こんにちは、カルバンさん」

「おや、何か用かい？」

ヒカリはリュックを下ろして中から石版を取り出した。

「長い間すみません」

僕は石版を受け取りながら、訊ねた。

「何か収穫はあったかい？」

ヒカリは頭をかきつつ、はいと答えた。僕はびっくりしたさ。僕だってあれこれ調べたが何もわからなかったというのに、目の前の少女は謎を解いたというのだ。僕は頼み込んで石版の秘密を教えてもらった。

「なるほど。ところで君はどうしてそんなことをしているんだい？」

ヒカリはバツが悪そうにうつむいた。どうやら話せないらしい。

「まあいいさ。これから昼食でも一緒にどうだい？」

「あの、お礼にお弁当を作ってきたので、良かったらどうぞ」

そう言っただけで差し出されたのは、赤いギンガムチェックのクロスに包まれたお弁当だ。僕は嬉しくなって、彼女を誘って海岸で食べることにした。

「うん、うまい。ヒカリは料理が上手だね」

「まあ、カルバンさんってお世辞が上手ですね」

僕が褒めると、ヒカリは恥じらいながら答えた。隣で卵焼きをほ

おぼるヒカ리를眺めながら、お茶を飲む。そんな僕に気付いたヒカ리는頬を赤く染めた。

「私の顔に何かついています?」

「いいや。君を見ていると、いい年をしてドキドキするんだ」

ヒカ리는耳まで真っ赤にして僕を見つめる。僕はヒカ리의手から食べかけの卵焼きを奪うと口に放り込んだ。

「うん、うまい」

ヒカ리는口をパクパクとしていたが、やがて手をぎゅっと握り締めると、うつむいてしまった。なんて可愛い生き物だろう。こんなにも興味をそえられるなんて。

僕は、ぎゅっと握りこんだヒカ리의手に自分の手を重ねた。すると、ヒカ리는はじかれたように僕を見た。僕はニツと笑いかける。

「ヒカ리는僕のことをどう思っている?」

「どうって?」

「好きか、嫌いか」

するとヒカ리는僕を潤んだ瞳で見つめた。よし、いい感じだ。

「僕は君にいかれちゃってる」

「いかれる?」

ヒカ리는ポカンとして僕を見る。僕はここぞとばかりに攻撃を仕掛ける。

「ヒカ리가好きだ」

ヒカリはこぼれ落ちそうな目をさらに大きくした。そしてそのまま動かない。だんだん心配になってきて、彼女の目の前で手を振ってみる。

「ヒカリ、大丈夫か？」

まるで放心状態だ。そんなに嫌だったのだろうか。気持ちが萎えてしまう。僕は弁当を片付けると、ヒカリに手渡した。

「こんなおじさんは恋愛対象にならないか。悪かったね。さっきのことは忘れてくれ」

そして帽子を手に取り、立ち上がろうとした。しかし出来なかった。横を向くと、ヒカリが僕のジャケットの裾をぎゅっとつかんでいた。うつむいていて、その表情をうかがうことはできない。

「早とちりです」

ヒカリは僕の方をまっすぐに見た。彼女の瞳は潤んでいて宝石のようにきれいだった。そして早とちりという言葉に胸が騒ぐ。僕は屈みこみ、右手をヒカリの頬に添えて訊ねた。

「それは、どういう意味だい？」

「カルバンさんが好き」

想いが届いたとわかった途端、僕はへなへなと崩れ落ちそうになる。我ながらかなり緊張していたらしい。目の前の可愛い生き物に心はすっかり奪われている。

そんな僕を見て、ヒカリは心配そうだ。

「心配かけてすまないね。正直振られたらどうしようと思っていたので、ホッとしたんだ」

そう返事をする、ヒカリは破願した。僕はヒカリの手を取り立ち上がらせる。

「行こうか。大人の恋の仕方を教えてあげよう」

ヒカリの頭から、湯気が出ているんじゃないかというぐらい真っ赤になった。ああ、面白い。からかうのはこれぐらいにしておこう。大事な僕の宝物なのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5124n/>

---

牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編集

2011年12月17日18時50分発行